

## 自己評価報告書

平成23年 5月13日現在

機関番号：64303

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2012

課題番号：20320065

研究課題名(和文) パプア諸語の比較言語学的研究 ― 南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象として

研究課題名(英文) Comparative study of Papuan languages – the languages of South Bougainville and East Simbu

研究代表者

大西 正幸 (ONISHI MASAYUKI)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト上級研究員

研究者番号：10299711

研究分野：記述言語学・言語類型論

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：パプア諸語、比較言語学、ブーゲンヴィル、シンブー

## 1. 研究計画の概要

本研究は、パプア諸語のうち、南ブーゲンヴィル諸語と東シンブー諸語を対象とした、比較言語学的研究を目的とする。

それぞれの言語グループを専門とする大西正幸(研究代表者)と千田俊太郎(研究分担者)が、各言語グループの主要な言語や方言の語彙・形態データを、現地調査を通して収集し記述するとともに、稲垣和也(連携研究者)と寺村裕史(連携研究者)の協力のもと、データベースや言語地図を作成する。そしてそのデータの比較言語学的分析を行ない、それらの言語/方言の下位分類と、祖語の再構を目指す。また、研究の過程で、互いのデータ分析を検討し合いながら、パプア諸語の比較言語学的分析に共通する重要課題の、理論的・実践的解決を模索する。

長期的には、両研究者は、本研究の成果をもとに、ブーゲンヴィル諸語とシンブー諸語のすべての言語と方言の通時的関係を明らかにすることを目指している。

## 2. 研究の進捗状況

まず、南ブーゲンヴィル諸語に関しては、主要6言語の暫定的な下位分類を終え、そのうち4言語の新たなデータを収集した。特にナゴヴィシ語、バイツイ語は、これまで信頼できる言語データがほとんどなかった言語であり、本プロジェクトの調査で得られた資料はきわめて貴重なものである。ナゴヴィシ語に関しては、稲垣・寺村の2010年の調査で、その方言の地理分布の詳細が明らかになった。また、ナーシオイ語、モトゥナ語に関しては、新たな語彙データ、テキストデータ

が順調に蓄積されてきている。残りのブイン語、ウイサイ語に関しては、政治状況のため十分な実地調査ができず、主に大西が編纂した既存のデータを使っている。現段階では、ナーシオイ語、ナゴヴィシ語、バイツイ語、モトゥナ語の歴史的関係ははっきり再構できるまでになった。ブイン語、ウイサイ語とこれらの言語の関係の解明が最終年度の課題として残されている。

一方、東シンブー諸語については、千田が毎年2回ずつ行って来た実地調査で、諸言語の詳細な比較語彙データが着実に蓄積された。その特に声調に焦点をあてた分析も進んでいる。その結果、この言語グループに所属する言語/方言すべての歴史的関係の再構に関する仮説が建てられる段階となった。また、実地踏査を通しての地理データと、寺村の技術的な協力によって、このグループの詳細な言語・方言分布地図が完成されつつある。

なお、千田はまた、ブーゲンヴィル班と協力して、これまで調査されていない、北ブーゲンヴィル諸語のひとつ、エイヴォ語の資料も収集した。これは今後の研究の推進の足がかりとなるものである。

## 3. 現在までの達成度

② おおむね順調に進展している。

(理由)

南ブーゲンヴィル諸語、東シンブー諸語ともに、今までデータのなかった言語・方言の基礎データが、この3年間で着実に集積されてきた。こうしたデータをもとに、それぞれの言語グループ内の言語・方言間の歴史的関係が、大枠において明らかになった。また、南ブーゲンヴィル諸語における声門破裂音やア

クセントの扱い、東シンプーにおける声調の扱いなど、それぞれの再構における理論的な問題点もすでに明らかになっている。最終年度で、これらの成果をまとめ、当初の研究目的を達成することは、十分可能である。

#### 4. 今後の研究の推進方策

最終年度には、3 で述べた理論的な問題点に注意を払いながら、それぞれのグループのサブグループ핑の仮説を提供するとともに、今後の研究の方向性を提示することとなる。

今回のプロジェクトで提出する仮説をより確かなものとするためには、今後もそれぞれのグループの言語・方言のさらに詳細なデータの収集と分析を継続し、主要なものに関しては記述文法・辞書・テキスト集を完成する必要がある。また、歴史的な研究をさらに広げるために、南ブーゲンヴィル諸語に関しては北ブーゲンヴィル諸語との、また東シンプー諸語に関しては西シンプー諸語との関係を明らかにして行かなければならない。

これらの点を考慮しながら、最終年度の研究を進める過程で、今後の研究計画を立てる予定である。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

- (1) 大西正幸。「ナーシオイ語民話テキスト」。『地球研言語記述論集』3: 209-243。2011年。査読無。
- (2) 千田俊太郎。「東シンプー諸語サブグループ핑に向けて」。『地球研言語記述論集』3: 153-182。2011年。査読無。
- (3) 稲垣和也・寺村裕史。「GIS を用いた方言分布の地理的分析：南ブーゲンヴィルのシベ(ナゴヴィシ)語の方言地図」。『地球研言語記述論集』3: 183-208。2011年。査読無。
- (4) 大西正幸。「モトゥナ語におけるCi/Cu音節の短縮化」。『地球研言語記述論集』2: 165-194。2010年。査読無。
- (5) 稲垣和也。「ナゴヴィシ・シベ語の類別詞」。『地球研言語記述論集』2: 135-164。2010年。査読無。
- (6) Onishi, M., S. Tida, R. Ono, Y. Negishi, K. Tadokoro and T. Furusawa. 'Review on: Pawley, A., R. Attenborough, J. Golson, and R. Hide (eds.). 2005. *Papuan Past: Cultural, Linguistics, and Biological Histories of Papuan-speaking People.*' *People and Culture in Oceania* 24:81-87。2009年。査読無。
- (7) 千田俊太郎。「ドム語の多義 — 知覚動詞を中心に」。『地球研言語記述論集』1:

95-121。2009年。査読無。

〔学会発表〕(計5件)

- (1) Onishi, Masayuki. 'Bougainville (Papua New Guinea): The struggle for keeping traditional languages and cultures alive in the globalising world.' Chotro 3. Toshali View, Chail, Himachal Pradesh, India. 2010年9月14日。
- (2) 千田俊太郎。「ドム語(パプア・ニューギニア)における五段階」。国立国語研究所プロジェクト「節連接へのモーダル的・発話行為的な制限に関する研究」研究会。国立国語研究所。2010年7月25日。
- (3) 千田俊太郎。「ドム語と地理について」。2008年度日本オセアニア学会関西地区研究例会。国立民族学博物館。2009年1月31日。
- (4) 大西正幸。「言語地図のさまざまな可能性」。沖縄言語研究センター第31回年次総会。琉球大学。2008年7月6日。
- (5) Tida, Syuntaro. 'Some issues in reconstructing Proto-Simbu tones.' 2<sup>nd</sup> Sydney Papuanists' Workshop. The University of Sydney. 2008年6月28日。

〔図書〕(計1件)

- (1) 千田俊太郎。「トクピシン」(梶茂樹、中島由美、林徹編『事典 世界のことば141』。150-153 (608ページ)。2009年。